

---

# アクアリウム

葛城響子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アクアリウム

### 【Nコード】

N7540D

### 【作者名】

葛城響子

### 【あらすじ】

しづちゃんの水槽はまるで庭のようだ。

しづちゃんは今魚を飼っている。夏の縁日の金魚すくいで小父さん（しづちゃんのお父さん）に取ってもらったものだ。お腹のあたりと背びれのところに赤い模様がついていて、他は銀色っぽい白の金魚だ。光の反射具合でキラキラと光って見える。飼い始めたときには小さくて金魚鉢の中でも十分だったのに最近ではすっかり大きくなってしまった。それでは窮屈で可哀想だと小母さん（しづちゃんのお母さん）が言ったので金魚鉢より少し大きめの水槽で飼うことになった。水をろ過する装置が前より立派になって、砂利が底に敷き詰められた。

「あとね、水草を入れようと思うんだ」

しづちゃんは金魚に餌を与えながら言う。

それはいいかもね。このままじゃ、ちょっと寂しいと私は答える。少し間をおいて、どんな水草を入れるつもりなのと聞く。

しづちゃんは餌の袋を閉じて片付けたあと、本棚から重そうな図鑑を取り出す。しづちゃんが開いたページにはたくさんの水草の写真が載っている。しづちゃんはその中のひとつを指さす。

「これだったら、大きさや丈もちょうどいい。それにあまり成長しない」

ねえ、しづちゃん。他には入れないの。

「あまり入れすぎるとごちゃごちゃするからね。金魚が見えなくなってしまう」

しづちゃんは図鑑を閉じる。

耳をすますと水槽から水がコポコポと循環する音が聞こえる。それを聞いているとなんだかわけもわからず懐かしい気持ちの胸のあたりにせまってくる。そして、同時に安心する。不思議だ。

「金魚は一体、どこを見ているのだろうね。」

ふいに、しづちゃんと言う。

「ほら、金魚の目ってさ。僕らの目とはずいぶん違っただろう？僕らは目が合えばお互いが見えているけど、金魚は目を合わせていても、何だか目が合った気がしないんだよね」

金魚と目を合わせようとするなんて、しづちゃんは変わっているね。

「そう？かずみちゃんはそんなことないの？」

今まで考えてみたことがなかった。第一、私は金魚を飼ったことが無いからね。

「かずみちゃんも金魚を飼えばいいのに」

駄目だよ。うちはペットを飼うのはご法度だもん。

「そうか、残念だね」

うん。まあ、しょうがないよ。

私は藻が全くついていない綺麗な水槽を見つめる。一ヶ月に一度は金魚を別の容器に移して水槽と砂利を洗うのだとしづちゃんが言っていたことを思い出す。この水槽はすみからすみまでしづちゃんの手が行き届いているのだ。だから、汚れることは無い。しづちゃんは潔癖じみたところがあるのでなおさらだ。

この水槽はまるで庭のようだ。それもある程度自然のままにしておく日本庭園ではなく、何もかも計算しつくされたイギリス庭園のようだ。

この中で飼われる金魚は何を思うのだろう。私は金魚になったつもりで口をパクパク動かす。

「へんな顔」

しづちゃんは笑った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7540d/>

---

アクアリウム

2010年10月21日02時25分発行